

研究通信

1684

1972年12月刊
村落社会研究会
事務局

◇
明治学院大学
社会学部附属研究所

「研究通信 創刊号〜第五〇号」復刻に思う

―大会印象記に代えて―

原 宏

安房鴨川に直行する電車に乗ろうと、東京駅の地下深いホームへの階段を降りながら、私は便利になったものだと思つてくつろいだ。戦時中のことではあるが、千葉県には三回ほど行ったことがある。しかし房総半島に足を延ばしたのは初めてである。今までも海人の白浜・安房の神社・君津の町と、私のときどきの仕事にかかわって関心を寄せることはあったが、いつも東京止まりであった。牧野会員が「いつでもそうであるが、東北での大会にむかうときは、ふるさとへ里帰りするような気になるから不思議である。おそらく、会員諸氏も多かれ少なかれ、そんな気持で開催地の天童市へ向ったのではあるまいか」と書いていたことがあったが（『研究通信』七四号）、東北への参集は格別であるとしても、宿を共にして語り合う大会への足は、心なしかはずむものを覚えないではいられない。宿にてまず、『研究通信 創刊号〜第五〇号』復刻を手にした。

ズッシリと重みのある一冊の書物となったものを通覧してみると、村研二〇年の歩みのほぼ前半期にあたる十余年の流れが感慨も新たなものと思えた。「あとがき」にも少しばかり創刊当時のことになった記事があるが、私も一つ二つ感じたことを書きとめてみたいと思う。いわずもがなの気もしないでもないが、村研創立二〇周年の記念事業の一つとして行なわれた『研究通信』の複製刊行に少しお役にたったこと、さらに限定出版の第三号を与えられたことの喜びからと許していただきたい。以下『研究通信』は復刻版のページで示すことにする。

さて、当然のことながら、全体社会の変化に対応する村落社会の変化が、村研の創立・成長の過程と二重写しのようにありありと読みとれる。そして同時に宿題（共通課題）

・研究傾向の変化・会員の増大（会員年令の若返り）・年報・研究叢書といったことがらの移り変わりが、あるいは淡々として、あるいは熱っぽく記録されている。また歴代の事務局や大会を引き受けた当番校の記事が誇ることなくつづられている。しかし、これらについて論ずるのは私には不得手であるので、思いつくままのページを繰ってみることにしたいと思う。

「読めないことで有名」とまでいわれた号―それが創刊号である。それもそのはず―といっては失礼だが―、原紙切りから印刷まで、すべて当番校の会員の手作りのものであった。創刊号にはもう一つの涙ぐましい事実がある。それは創刊号は二回発行されていることである。復刻版を見るかぎりでは、割合に濃く印刷されて

いるが、これは復刊にあたって、印刷所が黒色のボールペンでなぞったから、幾分か見やすくなっているのである。このように化粧でもしなくては、電子複製の機械は受け付けてくれない。おまけに二〇年前のザラ紙だから、黄色に変色して、めくるたびに破れそうなるものになっていた。創刊号に初版と再版とがあるという話。

「会報第一号拝見しました。もっと正確に申せば拝見しようと努力しましたが、新制中学生が書いたよりも下手な文句と印刷ですの、却々読めませんでしたが大に努力して読めるだけ読みました。

呵々、この次からせめて高等学校一年生位の程度になって下さい」(一四ページ、中下)という故丸山会員の率直な意見を、編集者はこれまた率直に載せている。その同じ第二号に「会計上の見直しもちろしく好転しましたから、通信連絡委員の活動にも若干はより多くの費用を割きうるかと存じます。従って研究通信№2よりは№1の不評判を挽回する印刷が可能と存じます」(一一ページ下)と報告されたところなどを読めば、痛々しい気持さえしてくる。実際に紙面の変化が見られるのは第三号からである。

ここでひとつ注目しておきたいのは、創刊号・第二号の「ガリバン」・「連絡板」・「POST」といった見出しや随所に描かれたカット、これこそ当番校の会員が、全国の会員のだれかれを脳裏に浮かべながらつくった村研草創期の貴重な遺産であろう。手作りの味といおうか、手料理の思いやりといおうか、陶器ならさしずめ手づくねの茶碗の趣きとさえ思える。そしてある種の余裕さえ感じないではられない。この調子はわずかではあるが、かなりきれいに

なった第三号にまでは残っている。その第三号の「東京大学某助教は農村関係の講義を開始されたが聴講者が多すぎて夏の実習の事もあり、大いに喜んだり悲しんだり、個人的魅力もさることながら農村に対する「広く村落研究の」関心が如(何)にひろまりつゝある傾向の端的な現われと云わねばなるまい」(一九ページ、中)という記事を読んで、戦後の変化の激しさの一端をかいま見る気がしないではおれない。

第一回の仙台大会までに六号出ている。初の大会へ向けてしゃむに突っ走る姿が想像できるではないか。もうこのころはガリ版もプロの手に渡り、第一六号からはタイプ印刷となる。「臨時編集者の一人」が「この号から印刷面で一躍進をした。かつてこの研究通信の第一号の印刷に対するゴウゴウたる非難——それをお寄せ下さった方々に感謝する——のあったことも、よき思い出となろう」と書いている後記は、古い会員ならこれまた感無量であろう。

第六回大会で宿泊(合宿)大会が実現した。関係の記事は第二四号(一五五ページ、下)あたりから見られ、第二六号(一六九・一七二ページ)で「岩手県鳴子温泉にある八農民の家」において「合宿し入行」ことの決定が通報された。岩手県とあるのはもちろん宮城県の誤りである。「鳴子温泉に決定」と報じた第二八号の呼びかけ(一八一ページ)、詳細にスケジュールが示された第二九号(二〇〇〜二〇一ページ)に見られる事務局(愛知大学)や勸進元(東北大学)の並々ならぬ意気込みは、まさしく村研の歩みに大きなエポックをつくったことを物語っている。しかも宿泊大会の恒例化

がそこに始まったということだけでなく、七日・八日の大会に「六日夕刻参集九日朝解散」という但し書きがついている。これがいうところの前夜祭で、前夜祭の慣例もまたここに始まる。鳴子大会の余韻は第三〇号（二一〇ページ）にまで及んだ。

第一回の仙台大会、第六回の鳴子大会が「東北」を村研のメッカにしてしまったといつては言い過ぎだろうか。さきにあげた牧野会員の「里帰り」という言葉は、けっして誇張ではない。ものの何年かすれば、東北のどこかで開かれることを希望する気持になる。村研の「ふるさと」への回帰的志向、それが村研の体質となったのだろうか。東北の会員から、しかられるのを覚悟のうえで書いてしまったが、実は「村研の伝説」についてふれたからである。

あるとき、知人から「村研には会長もいない、閉会の辞もないという伝説があるそうですね」と聞かれたことがある。もちろん私は「伝説ではない。創立以来の伝統です」と答えた。また「社会学会で発表するのはコワくないが、村研で発表するのはコワイそうですね。これも伝統ですか」とも聞かれた。私は「いいえ、伝統ではなく、実感です」と答えた。山本登会員・大藪会員も仙台大会後、このことにちなむ筆を残している（四四ページ・上、四五ページ・中・下）ところで、新しい会員——特に若い会員の中には、村研草創期のあれこれを伝説化して理解している点もあるのではないだろうか。村研年報の古いところが、やたらに高価になり、いやいくら出しても店頭がないのだから、幻の村研年報とまでいわれるのも無理でない話である。その年報も、『村落社会研究』第〇集と形を改め、

増書房から出版されるようになったのが、昭和四〇年からである。これも村研の一つの転期を物語っている。前後するが、伝統といえ、会員はお互いに肩書きをとって、〇〇会員と表記することが創立以来の慣例であることを留意しておきたい。

さて、第二〇回記念の安房鴨川大会の印象記を求められたのであるが、これは『研究通信』の復刻版のあれこれを断片的にふれただけのものになってしまった。いかにも残念であるが、なんだか数年ぶりで投稿するような錯覚すらおぼえる——去年の今ごろ、第七九号に「部落の語源」を書いたのに。

「いくぶんか少な目になったような感じがするが、会員にはなつかしい白髪、会員が敬愛してやまない有賀喜左衛門会員が、学長の激務の間をぬって宿泊参加されたことは大きな喜びであった。共同討議のしめくりは、りんりんとして所懐を述べる有賀会員によって自然のうちに生まれた。配本されたばかりの『日本常民生活資料叢書・第一巻・民具篇』（三一書房）に、四〇ページを越える「日本常民生活資料叢書 総序——波沢敬三と柳田国男・柳宗悦——」を書かれた気概がほとぼしるように思えた。いまでも、そのときの様子が目に浮かぶようである。「初心を忘れないで、心のふれ合いの上に」と。（一九七二年一月三日）

第二〇回村落社会研究会総会報告

第二〇回（昭和四七年度）総会は、一〇月一日午後四時三〇分

千葉県鴨川市望洋荘に於て開催。議題にはいる前に、村研大会二〇回を記念して小池基之會員の挨拶、本大会開催にご協力いただいた千葉県議会議会史編纂委員長相川久雄先生の来賓祝辞がありました。総会座長は内藤莞爾會員。

一、運営委員会報告

(イ) 合同委員会の開催、第一回(昭四六・一〇・一四)於大会会場、第二回(昭四六・一一・八)於東京教育大、第三回(昭四七・五・三〇)於同上、第四回(昭四七・九・二)於同上。曰「研究通信」の発行、第七九号、第八三号の五号を発行。

(ロ) 村研一〇周年記念事業「研究通信創刊号第五〇号を電子複製・製本、頒価一、〇〇〇円(非會員二、〇〇〇円)。当該会計は本会計とは別にする。なお、本事業実施にあたっては、福武直、中野卓向會員に多大なご協力をいただいた。

一、会計報告

(イ) 昭和四七年度会計報告(別項参照)
(ロ) 会計年度の件、会計年度を大会終了の翌日から翌年九月三日までとする。

(ハ) 会費納入方法の件、従来の郵便振替に加え、各年度の事務局が適宜設けた銀行口座へも納入することができる。また事務局宛の現金書留でもよいものとする。

(ニ) 前納会費の件、前納された会費については、のちに会費額が変更(値上げ)された場合も、その差額は徴収しないものとする。

一、その他事務報告

昭和四七年九月三〇日現在の会員数二九一名(内住所不明五名)。本年度の新入会員紹介

一、編集委員会報告

(イ) 年報第八集の刊行について 年報第八集の編集については、寄稿された原稿の内容について編集委員会において充分に検討を加え、充実した年報の編集をおこなうというこれまでの方針に従って実施すべく準備をすすめていたが、寄稿の切日のおくれたことと、論文の数が少なかったこともあって、必ずしも当初の計画にそいえなかった。頁数も例年より四、五〇頁少なくなってしまう。年報の内容のより一層の充実をはかるためには、會員の各位より沢山の原稿を寄せられることが何よりも望まれるところであると同時に、委員会において検討する時間的余裕を確保するために、寄稿される方は是非とも原稿の切日を守ってもらいたい。

(ロ) 村落社会調査研究叢書第三輯の編集について これまで研究叢書を二輯まで刊行したのであるが、福武委員より「さらに四輯まで刊行できる資金のメドがついたので、ひきつづき準備をすすめてもらいたい」という趣意のご好意により、第三輯の応募原稿の中から、黒崎八洲次良會員の原稿を採択することにした。刊行は来年三月の予定。題目「近代農業村落の成立および展開と農家の経営——北海道虻田群留寿郡村大西家文書を中心に——」。

なお、第十九回大会において報告された菅野・田原・網谷会員の山形県庄内の一村落の共同研究は、当初年報第八集に掲載を予定し、原稿執筆してもらったが、研究内容の全体に及ぶ記述となると枚数が多くなるため、研究叢書にまとめてもらうよう依頼した結果快諾をえた。したがって、本書第四輯には、右の三会員の論文が予定されている。五輯以降についてはまだ採択予定の原稿はないので、今後、会員の各位の中で研究成果をまとめるご計画のあり次第・題目・要旨を添えて委員会まで申し出てもらいたい。

（イ）年報第九集に原稿応募をされる方は、本研究大会終了時までに、題目・要旨を添えて申込んでもらいたい。委員会では大会終了後に大会報告者に対する原稿の依頼検討とあわせて協議し、通知する。ただし、応募原稿について年報掲載の可否は、提出された原稿の内容を検討した上で決定するというこれまで手続きに従う。

一、昭和四八・四九年度委員選出

現在の委員の任期満了にともなう委員の選出に関して議事を提出した際に、小池会員より、村研発足当時には「宿題委員」制度があって、次年度大会の共通課題などについて問題点を深め、整理し、共同討論に備えるという活動をしてきたが、この制度をもう一度復活したらよいと思う、という提案があり了承された。

委員の選出方法については、従来の手続きに従って選衡委員

七名を投票によって選出し、委員を決める方法をとった。

○選衡委員 小池基之、福武直、中野卓、柿崎京一、川越淳二
余田博通、内藤莞爾

つぎに右の選衡委員が集って選衡委員会を開催（二〇月一日午後八時三〇分、大会会場宿舎において）し、左記の各委員を選出した。

○運営委員 布施秩治、島田隆、安孫子麟、田原晋和、安原茂、蓮見音彦、服部治則、高山隆三、吉沢四郎、川本彰、内山政照、中井信彦、高橋明善、牧野由朗、村長利根朗、余田博通、後藤和夫、松本通晴、内藤莞爾、原宏、以上二〇名。

○宿題委員 岩本由輝、安孫子麟、高山隆三、似田具香門、高橋明善、蓮見音彦、後藤和夫、以上七名。

○編集委員 島崎稔、中野卓、園田恭一、小池基之、福武直、柿崎京一、以上六名。

一、昭和四八年度事務局

次期事務局を服部治則（山梨大学）、川本彰（明治学院大学）にお願いすることとし、服部、川本両会員よりお引受けいただく旨の挨拶があった。

一、昭和四八年度大会当番校

次期大会当番校として愛知大学（川越淳二会員ほか）にお願いすることになり、川越会員からお引受けいただく旨の挨拶があった。

一、その他

（前事務局民秋ならびに編集委員柿崎記）

昭和四七年度（昭四六。一一

）四七。九。三〇）

村落社会研究会 会計報告

収入 前年度繰越金

一一六、二五一円

会費収入

一二九、七五〇円

計

二四六、〇〇一円

支出

「研究通信」七九〇八三号印刷費

八二、五〇〇円

その他印刷費

三六、五〇〇円

「研究通信」七九〇八三号發送費

五五、二〇五円

通信・連絡費

一七、四六一円

謝金

四、〇〇〇円

消耗品費

五〇〇円

計

一九六、一六六円

差引（次年度繰越）

一四九、八三五円

第二〇回村研大会 会計報告

収入

宿泊費（含食費）

三一〇、四〇〇円

大会参加費

三九、五〇〇円

寄付（千葉県）

一〇〇、〇〇〇円

計

四四九、九〇〇円

支出 宿泊費（含食費・諸費）

三一五、〇三八円

「年報」「研究通信複製版」寄贈（千葉県、他）代

八、四〇〇円

大会アルバイト費

六、五〇〇円

文房具費

一〇、一一〇円

運搬費

四、三六〇円

懇親会等経費

三一、九八六円

その他雑費

四、四五〇円

計

三八〇、八四四円

差引（残金は「研究通信複製」費に繰入

六九、〇五六円

委員会記録

○ 第一回 合同委員会

一、期日 一〇月一二日正午より

一、場所 研究大会場（鴨川市、望洋荘）

一、出席者 新旧各委員（欠席、園田委員）

一、議題

(1) 第二一回研究大会の共通課題についてすでに各会員から提出されているアンケートなども参考にして、次回運営委員会において決定することにした。

(2) 「宿題委員」の役割等について 宿題委員の分担すべき役割

について、とくに運営委員会との関連において討議された。その結果、宿題委員は共通課題について研究会を主宰し、課題についての問題点を整理し、大会時までにはその成果を会員に伝える。研究会場の設営その他事務的な処理は事務局が主としてこれに当ることとした。

(イ) 新事務局、次期大会主催委員からの連絡 事務局服部、川本委員から、事務局の連絡場所を明治学院大学に置くことについて報告があり、了承された。次期大会主催(愛知大学)牧野委員より開催地については、後日、決定しだい報告するということであった。

○ 第二回 合同委員会

一、期日 二月八日(金)五時より

一、場所 明治学院大学社会学部附属研究所

一、出席者 小池基之(御家族の御病氣を御して御出席のために中途退席を願った)、中野卓、島崎稔、柿崎京一、蓮見音彦、高橋明善、似田員香門、事務局(服部、川本、益田明美)

一、議題と報告

(イ) まず事務局より報告事項をのべ、ついで議題に入った。

(1) 財政事情 本年度研究、事業計画に応ずる財政は相当の緊縮が予想されること、そのためには会費の徴収に全力をあげ、また各会員の協力をもとめることが重要である。

(2) 名簿発行の件 前事務局においてすでに新名簿を発行した

が、その後会員の住所変更なども多く不便な点が多かったことにより、今回も新名簿訂正版発行の議がだされたが、現下の財政事情もあり、いささかの不便はしのぐこととして見送りということになった。

(ロ) 宿題委員会関係 本年度の共通課題についてまず事務局より手許にあるアンケート回答、ならびに会員諸氏よりの便りを披露し、それらの資料をもとにして熱心な討論が行われた。資料の二、三については後記参照。結局、昨年度共通課題の継続について積極的な反対意見はアンケート回答等においても見あたらなかったが、継続するかいなかの問題をふくめ、宿題委員会に申し送り、本日の討論をふまえて再度審議のうえ、次回合同委員会に原案提出を願うことになった。

(ハ) 編集委員会関係 まず小池会員より編集方針をより敬重にすることの意見が提出、その後、柿崎委員より(1)大会報告者に対する執筆依頼、および応募者の取り扱いについて、(2)研究動向の執筆依頼についての件について意見が求められたが、(1)については大会報告者といえど執筆依頼を求めぬこともありうるが、個々についてはもう少し検討してからに、(2)については執筆依頼に応じて下さる方について意見を出しあった。

— 会員通信 —

○ 岩本由輝会員

共通課題については、今年のテーマで少くとももう一年やるべしとは思いますが、今年のような報告者の選択ではどうにもなりません。まず何よりも近代都市の歴史的評価についての報告が欠けていたのが大きな欠陥でした。単に現在の都市と農村との関係をいかに数字で結びつけたって何も出て来ないはずで、その意味で近代都市の形成を農村の都市化という形で追求する必要があります。その場合、近世段階ですらに拡散、分化していた共同体の諸機能が、近代においてどのように改編されて行ったかを、例えば労働組織、水利組織、林野利用組織、同族組織、祭祀組織等についてみただけで、それを総合する形で「近代日本の都市と農村」を論じなければ意味がないと思います。そうすれば、これまで必ずしも十分に論議のつくされなかった近代以前の農村と近代農村の差違もおのずと明確になってくるでしょう。とにかく自動車の普及と台数とか買物を町場とするか、地元とするかなどという現象から都市と農村の関係をみても何も出て来ないはずで、こうしたことをいざ「研究通信」の原稿としてお送りしようと思いません。なお、研究会は日曜日ということでもないし山形からは出かけられません。必ず出席できるわけではありませんが、その点、御留意下さい。

○牧野市朗会員

第二一回大会の共通課題は例年通り本年度の継続がよいと思えます。

しかし、本年度の大会の報告あるいは共同討議にみられたように、この課題は非常に広範囲なまた多岐にわたる諸問題をかゝえておりますので、大会をもつ前に三、四回の研究会によって、問題になる若干の柱を用意する必要がありますかと思えます。

その研究会は宿題委員会の方を中心にして行なわれるかと思えますが、できることなら、その論議の主要部分、あるいは柱といったようなものを夏休前の研究通信に掲載していただき、それを参照にして大会の報告者の募集、または事務局より依頼されたら、いかがでしょうか？ これは事務局にとって大変な仕事かと思われませんが……。

そして、大会当日、共同討議に入る前に、鎌倉大会のときのように、地方会員、一般会員のために研究通信に記載した研究会で問題になった柱を整理して報告していただけたら、討論の展開に役立つのではないかと思います。

研究会はやはり在京委員の方にお願ひするしかないと思えます。御手数数のことと存じますが。

木枯しが吹きだすと寒さによる緊張のためか、学内が騒然としてきて落着かない空気に一変し、憂鬱な毎日が続きます。なお、来年度の大会は志摩郡「合歓の郷」を予定して交渉を進めておりますが、東北、関東からは多少時間がかかる（名古屋から二時間余）のでいささか案じております。

○島田隆会員

(1)「第二一回の共通課題」

第二〇回の継続でよろしいと思ひ

ます。但し来年は「日本社会における村落と都市」、これに副題をつけて、焦点をさぼるようにはどうかと思ひます。第二〇回大会では課題を追求するための、いわば模索的な問題提起がなされたと思ひます。そこでは、現段階（布施、岩城報告、その他自由報告）、現在と戦前との比較（戒野報告）、戦前長い時期にわたる村との関連について柳田説の理解（中井報告）、というように時期としては一応出そろった感があります。しかし何しろ各報告がままえられた村落や都市の構造概念がたいへんくいちがっており、また村落や都市が存在する各時代の全体像の規定がはっきりつかめませんでした。またこのことを理解するための個別実証の結果が充分出されなかったこともありまます。したがって各報告にいろいろ註文をつけても、そのすべてをうまく整理しにくい状況でした。これは、あるいはテーマがあまりに広汎すぎたからだと思ひますが、初年度として問題を捨うという観点に立てば止むを得ないでしょう。したがって来年度は同一課題で、但し、焦点的な問題を立てて、それを副題で表現するか、又は同一趣旨のテーマで限定された主題を設定してはどうかと思ひます。そのいずれにしても「村落の都市化」とか、「各時代の村落と都市の構造関連」とかです。

(2)「今後の研究会の実施方法」

内容的には今年の御報告をふまえて、村落、都市の社会構造の性格規定、各段階を追って、

その変化などが焦点になると思ひます。

(3)「第九集の原稿依頼」 まず、今年度の御報告がほしいと思ひます。あまりに表が多ければ取捨して頂いて、その分は本文で充分に表現して頂きたく思ひます。学界動向の「歴史」の部分が二年間欠けていますので是非ほしいと思ひます。

共通課題に対するアンケート回答

1. 一九七〇年代における日本の農業の位置とそれへの村落社会の対応
2. 全体社会において都市と農村をいかに把握しうるか
3. 日本の経済・社会に対する農村（含む漁・山村）の役割
4. 本年と同じでよい、但し歴史的な展望を含めて
5. 本年の継続（二名）

事務局短信

千葉の大会で事務局をお世話しました。公私ともに全くその態勢になく、不安なまゝにおひきうけいたしました。おひきうけしたからには一生懸命にやりたい。どうか皆様の温い御協力をお願い申し上げます。

事務局の連絡先は左記の通りです。

東京都港区白金台一ノ二ノ三七 (〒一〇八)

明治学院大学社会学部附属研究所内村落社会研究会事務局(担当 益田明美) 電話 〇三(四三三)八二三一

なお、年末年始など休暇等のため緊急にご連絡いただくのは大学は不便ですので、そのような場合は左記に願います。
東京都小平市美園町三三九(〒一八七)

川本 彰 電話 〇四二三(四三)〇五四六

研究通信第八四号の発刊がのびのびになってしまったことを重々お詫びいたします。しかし何分にもボンコツエンジンにて皆様に御迷惑をおかけいたすばかりと存じます。御寛容のほどお願いいたします。さて、事務局よりのお願ですが、第二回合同委員会の記事中にも訴えたとおり、赤字必至の財政状態です。会費納入についてまげて御協力いただきたくお願いいたします。納入の方法は、つぎのうちいずれかに願います。

一、郵便振替 口座番号 東京八〇二二七 村落社会研究会

一、銀行払込 三菱銀行品川駅前支店

口座番号 〇四四一四一三一六二四 村落社会研究会代表服部治則

一、現金書留 東京都港区白金台一ノ二ノ三七(〒一〇八)

明治学院大学社会学部附属研究所内

村落社会事務局 益田明美

なお、本号から積極的に皆様からのお便りを「会員通信欄」に掲載させていただきたいと思えます。どんなことでも結構で

すからお便り、注文、感想、お叱り等々をいただきたいと思えます。どうかよろしく。

原会員より早速「研究通信」復刻に思う」という投稿を頂きました。厚く御礼申上げます。今回は大会印象記が欠けてしまったので、早速、島田隆会員に御願いました。御多忙にもかかわらず快諾を頂きました。次号にのせたいと思えます。遅れたことをお詫びいたします。

会員各位へのお願ひ

「研究通信 復刻版」まだ大分余分があります。申すまでもなく村落研究のあゆみと水準を端的にしめし、学界の貴重な財産たるこの刊行物をさらに一般学界ならびに関心をもつ方面に広く啓蒙宣伝することは我々の義務であるかとも存じます。会員各位よろしく御高配のほど願います。価格は会員一〇〇〇円非会員二二〇〇円。荷造発送費一七〇円こみで事務局へ御申込み下さい。

住所不明会員についてのお願い

御存知の方至急おしらせ下さい

〇 笹森秀雄 北海道大学文学部

- 佐藤嘉一
- 根岸義夫 国際キリスト教大学
- 松村安一 東京学芸大学
- 山口光男

会 員 動 向

◇ 新入会員紹介

- 岩城完之 北海道大学教育学部
(〒〇六〇) 札幌市北一条
- 岩崎信彦 高野山大学
(〒六〇六) 京都市北区紫竹東高樞町三七
- 井上文夫 関西学院大学
(〒六六二) 西宮市広田町九一三一
(電話) 〇七九八一二三一―二三三〇
- 大西雅利 東京大学
(〒一八二) 泊江市和泉二二二五 みどり荘

- 交野正芳 関西学院大学
(〒六三一) 奈良市学園前北一―七―七七
(電話) 〇七四二―四五一七四九三
- 小島政孝 東海大学大学院
(〒一九四一〇一) 町田市小野路町九五〇
(電話) 〇四二七―三五―二〇四六
- 益田明美 明治学院大学
(〒二五三) 茅ヶ崎市赤松町九―二九
(電話) 〇四六七―八二―〇〇九九〇

◇ 所 属 ・ 住 所 等 の 変 更

- 江馬成也 (〒九八二) 仙台市鉤取字四郎太六―三九
(電話) 〇二二二―四五一―〇二六七
- 大津昭一郎 高崎経済大学
(〒一五〇) 東京都渋谷区南平台一七―一―二〇六
(電話) 〇三―四〇三―〇四九五
- 神田嘉延 (〒〇六三) 札幌市北区北三四条西七丁目 光荘
- 孝本 貢 (〒一七七) 東京都練馬区下石神井一―一九六
(電話) 〇三―九九五―二九八四

○酒井俊二 気象大学校

○高橋明善

(〒一九三)
八王子市めじろ台一丁目二一―一四
(電話) 〇四二六一六三一四六四二)

○田中幹夫

仙台第一高等学校
(〒九八〇)
仙台市茶畑

○中島寅雄

仙台第一高等学校内
北海道大学

(〒〇六五)

○矢内 諭

札幌市東区北二八条東三丁目
祇園寺学園短期大学

◇退会会員

○川合隆男

◇名簿訂正再録

御手もとにおくばりしてある名簿に余りにも沢山な訂正が今迄になされているので今回既発表済のものを含めて再録します。

○岩本由輝

電話 〇二三六一四一一六三三五

○上野和男

住所 (〒一七七) 東京都練馬区南田中町六一九

サニーハイツ八号室

○戎野真夫

所屬 東京大学農学部

住所 (〒一八四)

千葉市花見川五丁目二〇二二
(電話) 〇四七二一五八一八六二三

●奥田和彦

所屬 近畿広告(株)

住所 (〒五六一)

豊中市小曾根二一九

○北原龍二

住所 (〒三八〇)

長野市徳間中ノ割 合同宿舍六五四

○北原糸子

同右

○木下謙治

所屬 山口大学文理学部

住所 (〒七五四)

山口県吉敷郡小郡町大字上郷四〇七―三〇
(電話) 〇八三九七―二一―三九六

○黒崎八州次良

住所 (〒〇四二)

北海道亀田市鍛冶町八五―一二

○小林 茂

住所 (〒一九二一〇二)

多摩市速光寺三七―五

○斎藤典生

所屬 東北大学大学院

住所 (〒九八〇)
仙台市土樋一丁目二七 八蛟舎

○佐々木文賢

所屬 創価大学

住所 (〒一九二) 八王子市丹木町一―二三六

創価大学教員宿舍KA八〇一

(電話) 〇四二六一九一―二二二一

◎ 以下は次号に掲載いたします。